

題目：理学療法士におけるメンタリング行動指標の開発と その信頼性・妥当性の検証

保健医療学専攻 医療福祉教育・管理分野

学籍番号：20S3081 氏名：石野 麻衣子

研究指導教員：堀本 ゆかり 教授 副研究指導教員：丸山 仁司 教授

キーワード：理学療法士，メンター，メンタリング

1. 研究の背景と目的

理学療法士の卒後教育の問題点は、明確な指導の基準がなく経験則によるものが中心であること、経験の浅い未熟な指導者が多いこと等が挙げられ、教育学的背景に乏しい現状がうかがえる。本邦における理学療法士のメンター養成教育については、ガイドライン等はあるものの統一されたプログラムやメンタリング行動指標は見当たらない。各職場で行われている人材育成は、メンター個人の能力に依存しているのが現状である。以前より理学療法士の急増とともにその質の低下が指摘されているが、卒後教育の現状を考慮すると要因の一つにメンターのスキルの問題があると推察できる。メンターの質を確保するためには、メンタリング行動の特性を把握し、それらを測定できる尺度が必要であると考えられる。そこで本研究の目的は、理学療法士のメンタリング行動指標を作成し、その信頼性と妥当性を検証することとした。

2. 方法

本研究は Google フォームを利用した無記名のアンケート調査である。調査項目は、年代、性別、経験年数等の基本属性と、先行研究¹⁾²⁾を参考に一部オリジナル項目を加えたメンタリング行動に関する質問 37 項目（4 件法）、後輩指導で工夫していること（自由記載）である。データの分析は、まず基本統計量を算出し天井効果と床効果を確認し、尺度の因子的妥当性を検討するために、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。固有値 1.00 以上及び因子の解釈可能性、因子負荷量 0.35 以上を基準として項目選択を行ない、内的妥当性の検討には Cronbach の α 信頼係数を算出した。次に、得られた因子モデルを基に共分散構造を用いた確認的因子分析を実施。適合度指標には Comparative Fit Index (CFI)、Goodness of Fit Index (GFI)、Adjusted GFI (AGFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) を用いた。統計解析には IBM 社製 SPSS ver28、IBM 社製 SPSS Amos ver28 を使用し、有意水準は 5%とした。

3. 倫理上の配慮

本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：20-lfh-080）。また、対象者には調査の目的や内容等について書面を通じて説明し、回答を以て同意とした。

4. 結果

調査期間中、アンケート回答ページに 419 件のアクセスがあった。そのうち、重複回答や回答内容に不備がある 18 件を除いた有効回答数は 401 件（有効回答率 96.0%）であった。

まず、床効果を認めた 1 項目を除外した 36 項目を分析対象とした。因子数は 5 因子とし、因子負荷量が 0.35 以下の 3 項目を除いた 33 項目について探索的因子分析を実施。KMO 測度は 0.94, Bartlett の球面性検定は $p < 0.01$ であり、因子分析の適用は妥当と判断した。解析の結果、第 1～5 因子をそれぞれ「効果的な教育支援」、「精神的支援」、「専門職のモラル」、「モデル機能」、「キャリア支援」とした。尺度全体の Cronbach の α 信頼係数は 0.95, 各因子では、第 1 因子 0.90, 第 2 因子 0.82, 第 3 因子 0.86, 第 4 因子 0.85, 第 5 因子 0.78 であった。次に、この 33 項目のうち、モデルの適合性を得るために因子負荷量が 0.6 以上でかつ他の因子に対する負荷量が 0.2 未満の項目を選択し、最終的に 18 項目を観測変数として確認的因子分析を行なった。得られたモデルの適合度指標は、GFI=0.918, AGFI=0.888, CFI=0.943, RMSEA=0.061 であった。

5. 考察

第 1 因子はメンタリング行動の基礎になる重要な項目であると考えられる。第 2 因子は支援の基本としてコミュニケーションの重要性、第 3 因子は理学療法士として適切な立ち居振る舞いができるように支援する機能を示していると言える。第 4 因子からは先輩理学療法士として後輩の手本となること、そうなるための自己研鑽の必要性があること、第 5 因子からはメンティの成長を長期的に捉えながらそれに合わせた支援をしていく必要性があると言える。

確認的因子分析の結果を踏まえ、理学療法士のメンタリング行動を考える上で必要な視点として、①後輩の状況を把握した上での客観的アドバイスと賞賛、②メンターからの声かけと話しかけやすい雰囲気作り、③ルールやマナーの教授、④モデルとなるための自己研鑽、⑤キャリア目標の理解とそれに対する支援、が挙げられる。これらは、理学療法士を育成する過程で心理的・社会的側面への支援の必要性を示すものであると言える。理学療法士が習得すべき能力を多角的に捉え、それらに対してメンターによる支援の重要性や必要性が示された。

本研究は対象者の属性に偏りがあり、全ての領域や年代の特性を反映していない可能性が考えられ、信頼性及び妥当性については更なる検証を行なう必要がある。

6. 結語

理学療法士のメンタリング行動のポイントとして、治療技術や臨床的思考を効果的に教授するために経験学習を促す支援やその基本としてのコミュニケーションの重要性が示唆された。

7. 引用文献

- 1) 妹尾鮎美, 三木明子: 看護師におけるメンタリング機能尺度の開発と信頼性・因子的妥当性の検証. 日本看護研究学会雑誌, 2012, 35 (2) : 35-61
- 2) 鈴木竜太, 麓仁美: 職場における仕事のあり方とメンタリング行動に関する実証研究, 神戸大学大学院経営学研究科ディスカッションペーパー, 2009